

明和町の中世



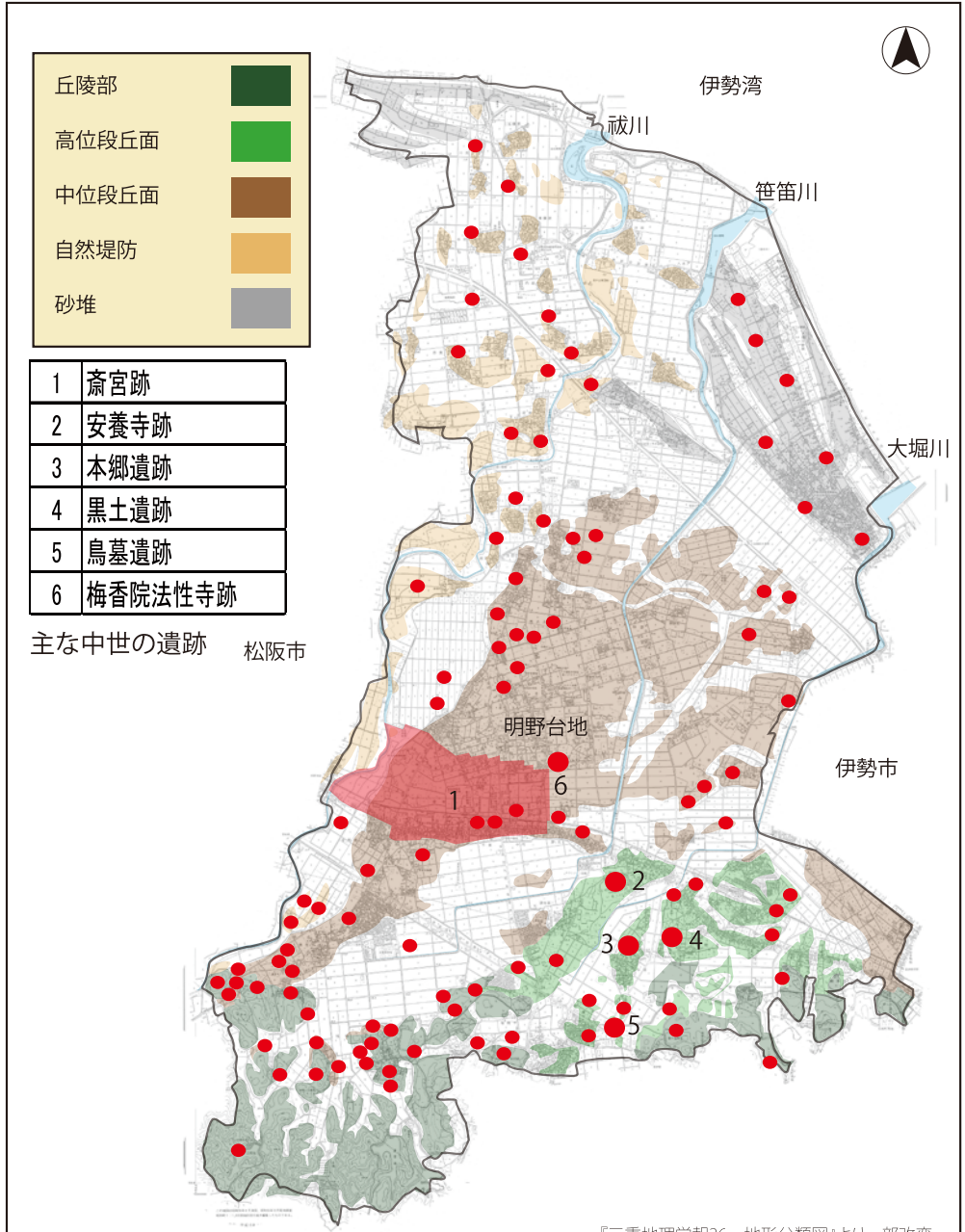
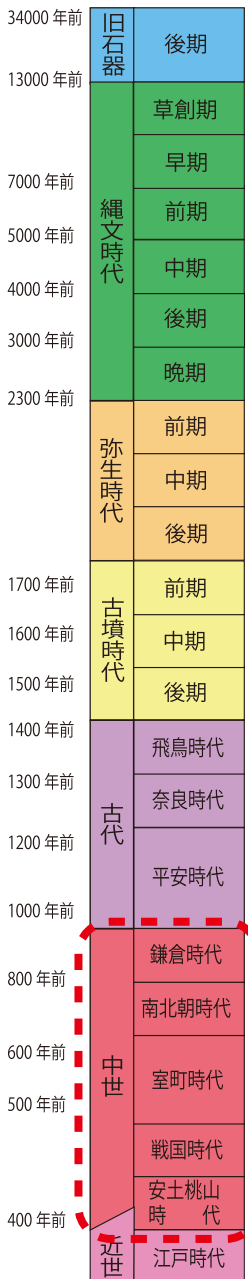
中世とは、律令政治による天皇集権国家の体制が崩れ、武士の登場や鎌倉幕府の成立以後を指し、室町時代・戦国時代などを経て、江戸幕府成立までの期間です。

齋王制度は、^{やすこ}愷子齋王を最後に群行が行われなくなり、南北朝の動乱に伴って制度自体が崩壊し、齋宮寮は歴史に埋もれていくことになります。ただ、中世は新たな時代の幕開けともなりました。

南勢屈指の規模で、「緒山」の列に数えられた安養寺が創建され、室町幕府や伊勢国司の北畠氏の手厚い保護を受けて発展し、最盛期には約 180m 角の堀で囲まれた大寺院でした。また、伊勢神宮への土器貢納を発展させる形で、伊勢型鍋（南伊勢系土師器）が成立しました。本郷遺跡では、^{しよざん}土器作りを指揮した有力者「有爾御器長」が本拠としたと考えられる居館跡が確認されています。伊勢型鍋は、東海・^{うにごきちよう}関東地方を中心に、九州・東北地方でも確認されており、全国的に流通していました。

現在町内にある集落は、その一部が中世に成立したと考えられ、現在の集落と同じ名前の村が造られ、古文書にも記されるようになります。また、町内には平安～鎌倉時代に作られた仏像が各寺院や自治会に保存されており、現在も歴史のつながりを感じることができます。

こういった中世の活動が近世の伊勢街道の整備や幕藩体制によって変化しながら、現在まで受け継がれています。私たちのご先祖様が築いてきた歴史を大切にしていましましょう。



伊勢型鍋（南伊勢系土師器）とは

南伊勢を中心に作られた鍋や皿類のことで、三重県の中世を考える標識資料となるものです。時代の物差しになるばかりか、他地域にも運ばれたため、当時の流通を探る手がかりにもなります。また、形が徐々に変化し、調理の方法が変化したこともわかります。

ひょうしきりょう

伊勢型鍋（南伊勢系土師器）の変遷

1100年



ばいこういんほうしょうじあと
梅香院法性寺跡や町内各地に集落が造られ始める。



梅香院法性寺跡

黒土遺跡や本郷遺跡で伊勢型鍋の製作が行われ始める。



黒土遺跡

1200年



あめのひらか
神宮に土器（天平賀）を貢納する長が、有爾御器長と呼ばれる。

町内各地で仏像が作られ、現在とほぼ同じ場所に集落ができ始める。

1264年 最後の斎王群行が行われる。

1297年 安養寺創建される。

1300年



ちこつだいえ
1312年 安養寺の癡兀大恵が亡くなり、七条袈裟などが遺される。



七条袈裟

斎宮跡では特殊な遺物などが見られなくなり、古里地区のみで集落が継続される。



安養寺跡出土の青磁香炉

1400年



きたばたけみつまさ
あんど
1407年 北畠満雅によって、安養寺領が安堵される。

鳥墓遺跡で土器を焼く窯や粘土をためる穴が掘られ、土器が作られる。



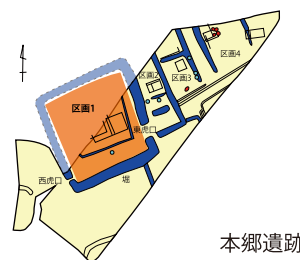
鳥墓遺跡の土器窯と粘土溜り

1500年



本郷遺跡で方形に区画した館が造られる。

池村城など、町内各地に中世城館が造られる。



本郷遺跡